

第9回新潟胆道疾患研究会総会

日 時 平成2年11月10日(土)
午後2時
会 場 有壬記念館2階

1) 膵・胆管合流異常に合併した胆嚢癌、胆管癌の2例

篠川 主・中山 卓 (南部郷総合病院) 外科
鱒淵 勉・佐藤 巖
田中 泰樹・朴 鐘千
渋谷 隆・前田 裕伸 (同 内科)

症例1: 68歳男性. 黄疸, 食思不振, 体重減少で入院. PTCD 施行し中下部胆管癌と診断され, 内瘻化により共通管が 25mm ある膵・胆管合流異常と診断された. 腫瘍は 40×11mm, IIa+IIb 様浸潤癌で, 膵頭十二指腸切除により絶対治療切除となり, 病理学的にも合流異常が確認された. 症例2: 60歳女性. 上腹部痛, 発熱, 白血球増多, 血清アミラーゼの上昇があり入院した. CT で胆嚢底部の腫瘍, 胆嚢管と総胆管の拡張を指摘され, ERCP で共通管が 15mm の膵・胆管合流異常が疑われた. 腫瘍は I+IIa 型 25×25×8mm 大の腺癌で, 胆石の合併はなく膵頭十二指腸切除で絶対治療切除となった. 胆嚢, 胆管内の胆汁中アミラーゼも高値を示し合流異常が証明された.

2) 当院における小児 ERCP 例の検討

成澤林太郎・阿部 実
柳沢 善計・秋山 修宏
植木 淳一・塚田 芳久
朝倉 均 (新潟大学第三内科)
八木 実・内藤万砂文
岩淵 真 (同 小児外科)

我々は1982年4月から1990年10月までに53例56回の小児 ERCP を施行した. 疾患別では胆道閉鎖症 (CBA) 22例, 胆道低形成症2例, 新生児肝炎3例, 胆道拡張症 (CBD) 18例, その他8例であった. 年齢別では1カ月未満1回, 1カ月~1歳未満28回, 1~6歳未満10回, 6~12歳未満14回, 12~15歳未満3回であった. ERCP の造影率は93% (52/56) であり, 成人のそれとはほぼ同率であった. 新生児肝炎は全例診断可能であり, CBA と新生児肝炎との鑑別には極めて有用であった. 興味ある造影所見を示した2例 (1例は総胆管, 1例は左右肝管まで造影され, 総胆管径 \leq 主膵管径) は肝内胆管低形

成症と考えられた. また, CBD における膵胆管合流異常の診断にも有用であった.

3) 肝外門脈の解剖学的位置異常を伴った肝内結石症の1治験例

川口 英弘・福田 喜一 (巻町国民健康保険) 病院外科

登坂 尚志・広沢 秀夫 (同 内科)

症例は83歳男性. 主訴は悪寒, 戦慄, 右季肋部痛, 発熱. 急性胆嚢炎の疑いにて当院内科へ入院. 入院時検査成績から胆道感染症による Sepsis ならびに DIC と診断. CA19-9 が 676 と著明に上昇し, CT では膵頭部癌が疑われた. PTGBD 施行後の造影では, 右肝内胆管は描出不能であった. 症状軽快後に施行した ERC では, 左右肝管は低位より分岐し総胆管内と前下区域枝に結石と思われる透亮像を確認出来た. 以上から肝内結石症と診断し手術を施行した. 術中所見では肝十二指腸間膜の前面を門脈が走行し胆管らしき部分は確認できなかったため, 経十二指腸的乳頭形成術を選択し, 形成した乳頭部より胆道鏡にて碎石した. 極めて稀な肝外門脈の走行異常が肝内結石の成因に深く関与していた症例と考え報告した.

4) 術前に捻転が解除された浮遊胆嚢の2例

福田 喜一・川口 英弘 (巻町国民健康保険) 病院外科

登坂 尚志・広沢 秀夫 (同 内科)

症例1, 痩せ型, 亀背を伴う83歳女性. 主訴は右下腹部痛. CT 上, 胆嚢は緊満腫大し, 浮遊胆嚢であったが, 症状軽快後の CT では胆嚢の緊満腫大は消失した. 以前にも同様な既往があり, 胆嚢捻転と自然解除を繰り返す症例と考え手術を施行した. Gross の I 型の浮遊胆嚢で, 組織学的に漿膜下の鬱血性浮腫が認められた. 症例2は, 発熱, 右下腹部痛を主訴とする78歳の女性. 検査上, 以上所見は胆嚢の緊満腫大のみであり, ERCP 施行時に胆嚢捻転が認められ, 圧迫及び体位変換にて捻転が解除された. Gross I 型の浮遊胆嚢であった.

以上, 浮遊胆嚢→胆嚢捻転→解除という病態を呈した2症例を経験したが, 右下腹部痛を繰り返す症例の診断においては, 上記の病態が存在することも念頭に置く必要があると考えられた.